

カリフォルニア大学群における Global Health およびカリフォルニア大学、
 デビス校における One Health Center への取り組み
 およびカリフォルニアラッコの生態、歴史的背景、
 保護並びに研究

**The approach for Global health at University of California schools
 and 'One Health Center' at University of California, Davis
 and behavior, historical background, conservation and
 research of the southern sea otter**

笹岡 香織¹、Jonna A.K. Mazet²、石井 猛³

Kaori Sasaoka¹, Jonna A.K. Mazet², Takeshi Ishii³

¹カリフォルニア州立大学、デビス校、獣医学部、獣医学科、大学院生

²カリフォルニア州立大学、デビス校、獣医学部教授並びに Wildlife Health センター長

³岡山理科大学

¹University of California, Davis, D.V.M, graduate student

²University of California, Davis, D.V.M, MPVM, Ph.D, and the director
 of Wildlife Health Center

³Okayama University of Science

さまざまな疾病によって、世界中で多くの人間が死亡している。医療の進歩により、その死亡原因も現在では、多岐にわたっていることが分かってきており、人間と動物の深いかかわり合いにより、動物（家畜ならびに野生動物）を宿主として感染する疾病（鶏インフルエンザ、結核）、昆虫などからによる感染、疾病（マラリア、南メキシコにおける妊婦のバッタの捕食による鉛中毒）などが大きな問題となってきており世界的な流行病として認識され始めている。人間の寿命が40歳から80歳に延びたことから、更に大きな影響を与えることは必須であるが、各国による認識の違い、また、更に隠された因子、要因なども推測されることから、1998年、クリントン大統領がG8の会合において、初めてこれらの現状、傾向、流行について政治的公約を発し、現在のオバマ大統領においては、年間に630億円の経費を費やして説明、解決にわたることを提示している。カリフォルニア州においても、その土地柄、例えば、海外からの物資の輸出入や海外からの観光客により持ち込まれる可能性のある疾病の危険性の高さ、メキシコからの移民数の増加なども手伝い、この問題には大きく注目しており、2009年6月8日に「Global Health」学会が行われ、現行9校あるカリフォルニア大学群から国連メンバーの一員も含めた専門家も介し、カリフォルニア大学群がそれぞれ特化した分野において一同にこの問題に取り組むことを提唱している。カリフォルニア大学群の中でもデビス校は、獣医学的分野で非常に優秀な教授群を有し、更には、野生動物の領域では他に類を

みない経験豊富な専門家がいるため、Global Healthの一つとして「One Health Center」を設置し、その参加リスト中には、カリフォルニア大学群はもちろんのこと、タイ、インド、フィリピンなどのアジア地域から、オランダ、スイス、フランス、イギリスまでもわたるヨーロッパ各国が参加している。ここで、アジアでは屈指の技術を保持し、かつ、さまざまな分野において専門家が介している学会を有する日本の参加も要請を受けている。

人間とのかかわり合いが深く、野生動物において経験豊富な専門家のもとにおいて、ラッコは、非常にユニークな生態、歴史的背景、研究がなされている。ラッコは、イタチ科に属し、その中でも一番大きな脊椎動物であり、海上でほぼ1日を過ごす。その体温を保持するために、体重の約25-30%もの食料を必要とするため日に幾度も潜水し、必要となる食料、例えば、ウニ、アワビ、イカなどを得ている。また、ラッコの生息には昆布が必要不可欠であり、その昆布に体を絡めることにより、海流にのって生息域から離れないようにしたり、親が食料を得るために潜水する際には、その子供を昆布に絡めることにより、子供を守り、かつ、潜水後の哺乳などを円滑にさせている。ラッコの持つ毛は体温調節には非常に重要な役割を担っており、その毛は2層からなり、およそ6cm²に100,000本もの毛をもつ。ラッコは、1日のほぼ大半を毛のグルーミングなどを行い、水に抵抗性のある毛を維持することにより、温度変化の激しい海と環境に耐えうように体温調節できてい

る。しかし、1700年から1800年代において、その毛皮を目的として乱獲され、約15000頭から30000頭いたラッコが、2000頭から1000頭までに減り、ほぼ絶滅の危機までに達した。その後1911年に、国際的にラッコの毛皮を取り締まる条約によって、1938年にはおよそ100頭が残すのみとなった。そのため、アメリカ絶滅危惧種保護法のもとで、絶滅危惧種として認定、保護されている。野生カリフォルニアラッコの数は徐々に増加し、2007年には、およそ2500頭がカリフォルニア沖にて確認されている。しかしながら、現在においては、人間との共存による海の変化、例えば、船などからのオイルもれによるラッコの毛の水への抵抗性減少、昆布の減少やトキソプラズマ、細菌、真菌などによる感染症による死亡、漁業との兼ね合いなどにより、予断を許さない状

況であり、ラッコの頭数の増加も非常に緩やかな増加である。また、ラッコの死亡率が上昇するようなことがあれば、その原因を迅速に究明、解決する必要があるため、カリフォルニア州政府関係者やカリフォルニア州立大学の生態学者、獣医師などにより、懸命にその生態学的、獣医学的な研究がつづけられ、年に一度その研究内容、成果を発表している。近年では、野生のカリフォルニアラッコを捕獲、無線送信器を装着、追跡、一定期間後の取り外しを実施することにより、生態的な行動を確認、データ解析を行うことでさまざまな情報をえることも可能となってきている。今後、この無線送信器によって記録された体温や正常な生態の指針となる潜水行動を体の栄養状態などと比較しながら統計学的に解析することにより、予想できる因子を究明していくことが必要となる。